

よい所を占領して居りまして、此所に蕃族を見ることは出来ぬ有様です。チヨツチヨと残って居るのは所謂熟蕃を見るだけであり、併ながら昔は此所に盛んに蕃人は居つたのです。今日は最早支那化して居る蕃人は見ることが出来るが、蕃風をして蕃人の言葉をして居る種族は此白い所には見ぬですから、左様御承知を願ひます。此東港から上の枋寮までの間は凡そ七里程あります。枋寮から致しまして水底寮といふ所へ四里程あります。此水底寮から蕃社へ登つて始めて歸化門社といふのがあります。此邊の二三社を見ましたが、是れは此方の恒春邊りの蕃社で見ると少しも違はない蕃族で、自からパイワンと申して居ります。此社の高さは中央部の生蕃と比較すると、餘り高い所には居らぬのである。御承知の通り、臺灣の地形は向ふから來て斯ういふ風に恒春へ行くほど低くなつて居る。丁度此邊りで御覽になつても知れます。此蕃族は………寫眞を追つて後で御覽に入れますが、恒春の上蕃社の蕃族と、風俗習慣及び體格言語の點に於て少しも違はぬです。さうして家はドウいふ風にして居るか、と云ふと家根壁、其他一切粘板岩を用ゐて居ります。それから風俗はドウであると言ひます。上蕃社下蕃社に於ける如く支那化されて居ります。衣服は支那輸入の黒布、則ち所謂烏布を用ゐる。今は彼等が自分で造らず、其衣服を着して居ります。それは所謂半體衣であります。下に腰卷の様な物をして居ります。是等も矢張黒木綿です。女は腰卷を左右より二枚合せまして、さうして裳はズツて居る。其上の服はドウであるといふに、彼等は斯ういふ風に掲書を示すして支那人の女の

服と同様な物を自分に仕立つてやつて居るのです。それから此蕃族に付いて殊に注意すべきことは入墨をすることであり、是れは男も女もする。女の入墨はドウいふ風にするかといふと、幾何學的の模様を入墨をする。此模様は恰も日本の沖繩でやつて居りましたのと違はぬ模様であります。此手の甲へ模様を入れる。是等は名家の印で關係ある人、及び歴史的な名高い家でなければ、此模様を入れることを許さぬ。それから男は丁度日本人が入墨を入れるやうな形に、幾何學的の模様を胸、脊、肩、上肢等に入れます。是等も名家の印若くは勇者を顯はす印です。此邊りは盛んに首狩が行はれます。ドナタであつたか首柵を見たいと言ひましたが、此首柵は丁度私が先達て時事新報へ寫眞を出しました。

(以下同出)

黄 尾 島

(承前)

理 學 士 宮 島 幹 之 助

本島にありて最多きは海鳥なるが、其主要なるもの五種あり。而して此等の海鳥は皆茲に於て生殖す。其盛時には全島鳥を以て充たさるゝの觀あり。予が本島探検視察の眼目も此等の鳥類にありたれば、次に各種の性状を記述す可し。

「ニアホウドリ」(Diomedea albatrus, Pall.) 此鳥は雁よりも大にして、本邦各處の沿岸には冬期普通